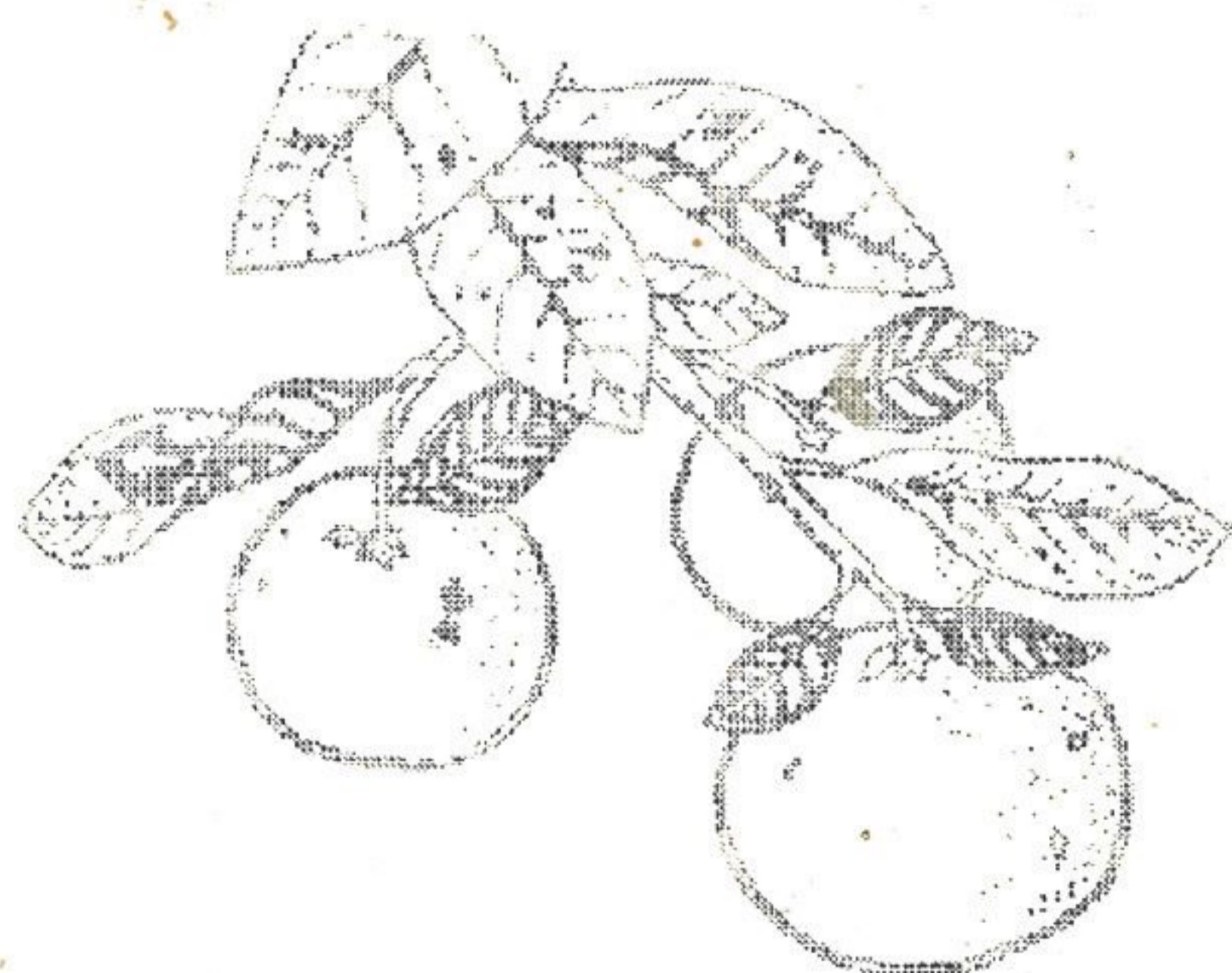


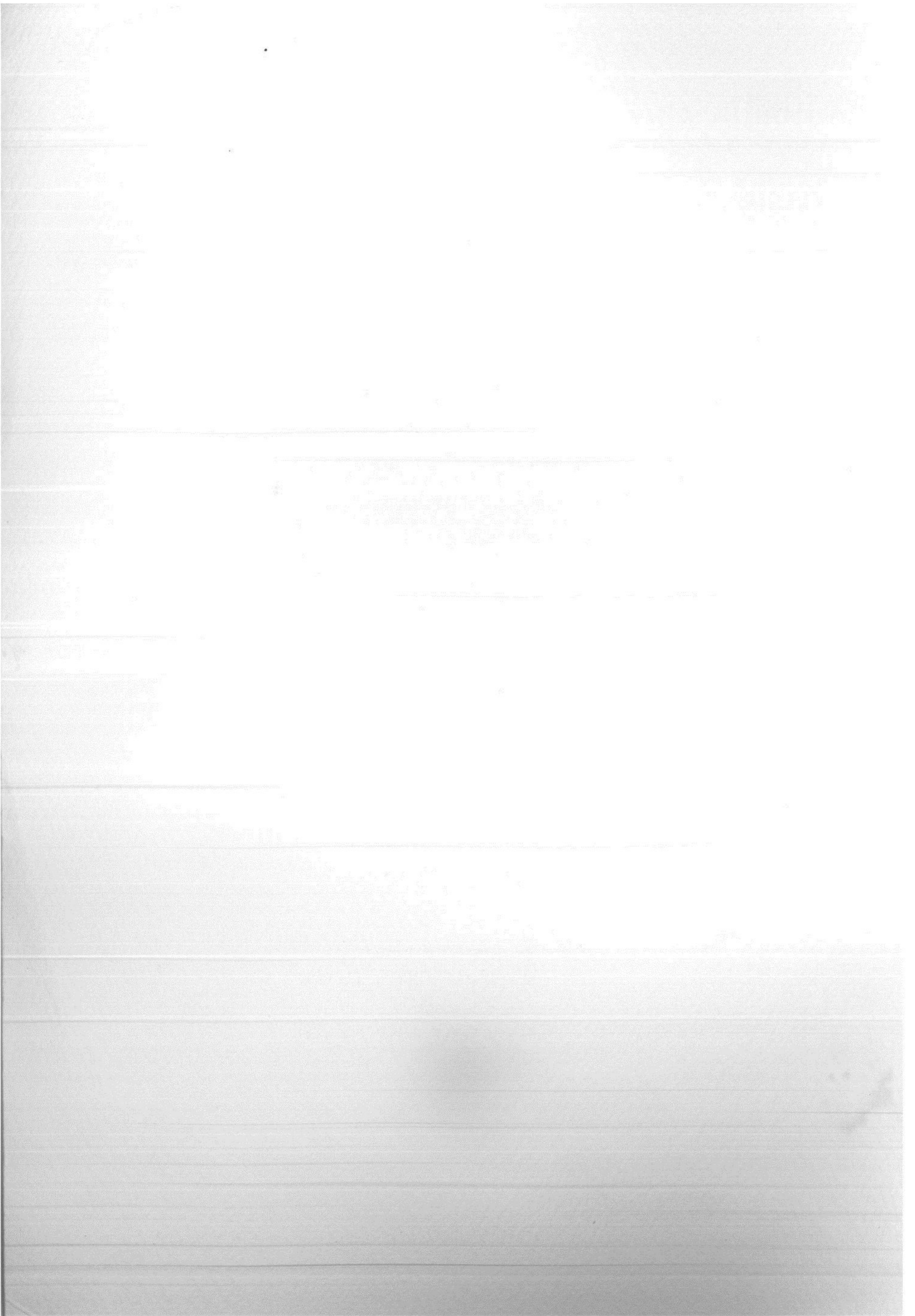
省農薬ミカン栽培の可能性

—病害虫被害解析と経済分析—

1996年 10月

京大農薬ゼミ





省農薬ミカン栽培の可能性

－病害虫解析と経済分析－

編者： 石田紀郎

執筆者：浅井元朗・市岡孝朗

中川ユリ子・中屋敷均

共同研究グループ：京大農薬ゼミ

京大農薬ゼミ：京都市左京区北白川追分町

京都大学農学部農林生物学教室

TEL&FAX 075-753-6133

e-mail : kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp



小さいころ お父さんが
よく連れて行ってくれた夕焼けスポット
蜜柑の香り 潮の音
生き物たちの吐息
僕はこれからもずっと見守っているよ
この大地にいっぱいの精気を放って

1967年、当時18歳の松本悟さんは農薬（ニッソール）の散布中に中毒を起こし、亡くなりました。この事件を機に1969年、「農薬裁判」が起こされ以後17年間に渡り続きました。



裁判の原告松本武氏の弟、仲田芳樹氏は農薬をできるだけ使わないという考えに立ち、新たなミカン園をはじめました。1975年のことです。

裁判に関わった石田を通じ、1978年から京都大学農薬ゼミの調査が始まりました。写真は開園当時（1977年）の様子です。

刊行にあたって

1970年代の初めは、農学部に身を置くものにとって、将来の農業・農学がどのようなになっていくのかと日常的に不安を感じる時代であった。それから20年を経過し、当時感じていた不安は的中し、日本の農業は崩壊寸前となった。その状況を反映して、大学の農学部が次々とその名前を変えつつある。合成化学物質に囲まれた現代生活は、人の健康とそれを取りまく自然をともに蝕み、その結果が露顕する時代へと突入している。この間、化学肥料や農薬を多投する現代農業のあり方に対してさまざまな人々が疑問をもってきた。そして、人（生産者と消費者）と自然の安全を求めた農業の模索が始まり、有機農業や省農薬・減農薬・無農薬農業などということばが一般的に通用するようになってきた。しかし、これらの農業・農法の実態を詳細に記録した資料は乏しく、有機農業をたんに復古的な「昔の農業」とのみ捉える風潮さえ生み出している。そのような時代背景のなかで、われわれは、実験用の圃場ではなく、農家の生計の一部を担う圃場での長期にわたる科学的調査を行うことができた。本報告書は、農薬を可能な限り省いたミカン栽培（省農薬農業）において、1978年から現在までの記録をもとに、病虫害・雑草の発生調査から収量調査に至るまで、省農薬農業の当面する問題を分析し、その可能性を模索したものである。有機農業や省農薬農業は、「昔の農業」でもなく「無謀な農業」でもない。それは、現代科学が対応できない、あるいは避けてきた問題を取り扱うきわめて「先端的」な科学として位置づけられなければならないと考える。われわれが再び「自然と折り合いがついた農業」にたどりつくためには、このような研究が幅広く展開される必要があり、本報告書が合成化学物質にまみれた農業からの脱却に少しでも役立てば幸いである。

目まぐるしく動く現代社会にあって、昨今、研究者も研究機関も短時間で研究成果が求められることが多い。そのような現代研究事情にあって、一つの省農薬園に生起する問題を、経営農民と苦楽を分かち合いながら20年間も調査を継続してきた。本研究調査がかくも長く継続できたのは、ミカン園の経営農民である仲田芳樹さん、松本武さんの農薬なしの農業をやりたいという強い信念と調査者に対する寛大さであり、また調査に参加された200人近くの農薬ゼミのメンバーの農業・農薬問題への尽きぬ関心である。ここに記して、共に喜びたい。

1996年10月

石田 紀郎



省農薬ミカン園から
紀伊水道を望む



和歌山県海草郡下津町
大窪の集落



省農薬ミカン園の全景



裁判の和解金を元に1986年に「悟の家」が建てられました。以後現在まで、省農薬園に調査や収穫などに訪れる人々に開放されています。



5月下旬には、省農薬園もミカンの白い花に包まれます。



毎年夏と秋の2回、農薬ゼミのメンバーによって病害虫の調査が行われています。写真は葉の青々とした夏調査の様子です。



「悟の家」では炊事をはじめとしてすべてが共同で行われています。写真は薪で火を起こして夕食の準備をしているところです。